教員活動状況報告書

提出日：令和　５　年　　３ 月　　１　日
所　属：　　獣医　学部　　獣医　　学科
氏　名：　五十嵐寛高　　職位：　　講師
役　職：

Ⅰ　ティーチング・ポートフォリオ

１．教育の責任（教育活動の範囲）

学生が卒業して臨床獣医師として業務にあたる際、まず必要なのは専門的なスキルや知識ではなく、幅広い分野に関する知見である。特に、内科は数多ある専門診療科目の中で最も基本となる診療科であり、あらゆる疾患の発生や病態に関する知識を必要とする診療科である。私は小動物内科の教員として、際立った専門スキルを教えるのではなく（それは卒後教育で学ぶべきと考えている）、卒業後に現場で戦力となれるだけの幅広い知識および基礎的な診療スキルを伝えることが責務と考えている。

科目名	学科・専攻	必，選，自	配当年次	受講者数
小動物獣医総合臨床３	獣医学科	必	5V	約 140
基礎・小動物獣医総合臨床１	獣医学科	必	4V	約 140
臨床病理	獣医学科	必	4V	約 140
総合獣医学	獣医学科	必	6V	約 140
獣医総合臨床実習	獣医学科	必	5V	約 140
小動物臨床実習	獣医学科	必	5V	約 140
小動物病院実習	獣医学科	選	6V	約 15

２．教育の理念（育てたい学生像，あり方，信念）

一般的な講義・実習の内容としては、基本的にモデル・コアカリキュラムに準拠した内容を過不足なく伝えるようにしている。特に、個人的な研究内容や過度に専門性の高いスキルについては、時間的余裕があれば一部の学生にはなお一層の興味を持たせられるのかもしれないが、実際にはモデル・コアカリキュラムの内容だけで講義時間が不足しがちのために控えている。参加型臨床実習においては、実際の症例の診断や治療が「教科書通りにはいかない」ことを学生が実感できるようにしている。特に、内科では複数の疾患を合併していたり、家庭の事情や金銭問題など獣医学以外の理由により教科書通りの対応ができなかったりするケースがほとんどである。これは卒業後にあらゆる獣医師が直面する問題でもある。そのため、参加型臨床実習中においては「見てるだけ」で終わることのない

よう、「鑑別診断は何か」「必要な検査は何か」「なぜ〇〇の検査が必要か」など常に学生にクイズ形式で問いかけ、自分で考えながら診療に参加していけるよう努めている。

３．教育の方法（理念を実現するための考え方，方法）

内科系の教育は、基本的に数多ある疾患の病態や診断検査、治療などを覚えることが目標となる。これに対し、私は研究者としては消化器内科を専門としているが、専門外の疾患についても過不足なく伝える必要がある。そのため、日常的に学内または学外の教員や専門医と情報交換を行い、時には必要に応じて相談しながら講義・実習の資料の充実を図っている。

内科における講義科目では、語呂合わせのように〇〇疾患の診断は▲▲、治療は××といった 1 対 1 の丸暗記に進んでしまいがちである。これは、覚えるべき疾患の種類が膨大におよぶためでもあるが、教科書の文章だけでは疾患のイメージをつかみにくいことも影響していると考えている。そのため、実際の症例の画像や動画なども時間の許す限りスライド資料に組み込むことで、疾患や各種検査法・治療法のイメージが湧きやすい資料作成を心掛けている。また、参加型臨床実習では同資料を記録したタブレットを携帯し、実際の症例と講義スライドをリンクさせながら学生に説明し、講義内容の理解度上昇を目指している。

講義時間外にも自主学習できるようにするための教材作成が現状の課題である。前職の研究室では電子カルテシステムに応用可能な AI による診断予測プログラムの研究が行われていたが、それを応用して仮想症例の診断や治療法を学生にクイズ形式で予測させるプログラムの作成を検討している。

アクティブラーニングについての取組

コアカリキュラムに基づいた講義内容で学習すべき内容が多いため、双方向性の講義は検討していない。講義で学習した知識を能動的に活用して施行するトレーニングは参加型臨床実習（小動物臨床実習・小動物病院実習）内で行うようにしている。上記したような学生自身で仮想症例の診断・治療を体験できるようなプログラムの開発を目指したいと考えている。

ICT の教育への活用

講義で用いたスライド資料や追加の動画教材などは学理内で公開している。ただ、実際の臨床症例を用いるため、個人情報や著作権・肖像権などの保護のために学外者への閲覧は禁ずる旨を学生に周知している。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

（①から⑤まで個別に記載又は①から⑤までまとめて記載ください）

①　教育（授業，実習）の創意工夫（A～C）

A　最新知見を反映するために毎年講義や実習資料は更新している。2022 年度は前年度とは比べて対面での講義・実習が増えたことで、事前説明はオンデマンドで済ませ、実習室では実技実習に集中する環境ができた。一方で、臨床系実習の再編に伴い、獣医内科学実習の内容は大幅な変更を余儀なくされ、それに伴う混乱が多発した点は反省が必要と考えている。

　その他、獣医総合臨床実習内の内視鏡実習については、これまではメーカー側の協力（人員＆機材提供）の下で実施できていたが、オリンパスホールディングスの獣医療からの撤退に伴って全て自力で賄う必要性が出たため、基本的には動画ファイル等のオンデマンド視聴となってしまった。これに対し、病院内にある機材を活用して希望者制で前年度と同様の内視鏡実習を開催したところ、実技実習に参加した学生からは好評を頂くことができた。機材がどうしても必要となるために全学生に対する実技実習の復活には設備投資が必要となってしまうが、引続き一人でも多くの学生が実技実習に参加できるように検討を進めていきたいと考えている（少人数制のまま、開催日程を増やすなど）。

②　学生の理解度の把握（A～C）

A　授業評価アンケートにおける理解度に関するスコアはほぼ例年通りであったと考えられる。

③　学生の自学自習を促すための工夫（A～C）

B　事前の学習資料として、動画教材の分量を前年から上乗せすることができたため、自学自習の機会をある程度増やすことはできたのではないかと思われる。ただ、参加型臨床実習期間中に学生へ問題を出したりすると、「講義で教えた（定期試験にも出題した）内容をすっかり忘れている」学生が少なからずいたため、講義・実習終了後における継続的な自学自習を促すための教材作りが必要ではないかと感じている。

④　学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（A～C）

A　学生からの質問メールに対しては、全て回答している。直接研究室に訪れた場合にもその場で答えるようにしているが、診療活動のため不在にしていることが多いため基本的にはメールでのやり取りで対応させて頂いている。

⑤　双方向授業への工夫（A～C）

B　コアカリキュラムに基づいた講義については、双方向性にした場合明らかに講義時間が不足するため実施していない（物理的に不可能と考えている）。一方、アドバンスな科目や実習科目については検討の余地があると考えている。現時点では、参加型臨床実習を

対話型で進めることにより、一定の双方向性を担保していると考えている。

※A（十分実施している）B（実施しているが十分でない）C（うまく取り組めていない）

⑥　国家試験対策としてどのような取組をしましたか。（V 学科，M 学科の教員の方のみ記載してください。）

V5 までの講義資料をベースにしながら、「国家試験だけで役に立つ」ような覚え方を指導している。ただし、卒業後の臨床現場では応用できない・問題のある覚え方も含まれるため、その旨は学生に強く周知しながら行っている。

5.学生授業評価

①　授業評価の結果をどのように授業に反映させましたか。

全て複数の教員で対応するオムニバス形式の講義・実習であるため、授業評価では自身以外への教員に対する評価やコメントを含んだ結果としてフィードバックされてくる。そのため、自身だけでなく他教員の教材やそれに対する学生のコメントを見ながら、自身の教材を修正するようにしている。

②　①の結果はどうでしたか。

①での修正がどの程度反映されたか解釈が難しいと考えている。少なくとも、学生からネガティブな意見は頂いていない。

③　②を踏まえて次年度はどのように取組みますか。

個人的には、対面＆オンラインのハイブリッド形式で行う場合、スライド上で動かす動画映像が、講義室では滑らかに見えるがオンラインではカクカクとした画像になってしまう点が次年度への課題だと考えている。これに対しては、スライド中に使用した動画を個別ファイルとして、学生がオンデマンドで視聴できるような形式に切り替得ることを検討している。

6.学生の学修成果

①　学生の成績向上に資する取組を何か考えていますか。

通常の対応ではあるが、講義資料や動画教材を学理で公開し続けることで復習しやすい環境を維持している（臨床症例の情報を含むため、ダウンロード制限は必要だが）。上記したように、講義実習が終了後も継続的にアクティブラーニングできるような教材を提供することで、さらなる成績向上が望めるのではないかと思う。

②　教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

現時点において、特記すべき成果や評価は認められていない。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

FD 講習会については時間的に可能な範囲で出席し、出来なかったものについてはオンデマンド教材を視聴した（動物病院での診療や育児の影響で、リアルタイムではあまり出席できませんでした）。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

上記したような、学生自身が症例の診断・治療を仮想体験できるようなアクティブラーニング教材の開発が目標である。これは研修医などの卒後教育にも応用できるため、なるべく早期に実現させたいと考えている。また、研修医向けの教材としてセミナー動画などを Google ドライブに閲覧可能な状態で保管しているが、これも、アドバンスな教材として学生が自由に閲覧できるようにしたいと考えている。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

シラバス，小テスト，レポート課題，試験問題，教材（配布資料，パワーポイント資料など）